

あとがき

環境教育2巻2号をおおどけします。日本環境教育学会がスタートして早くも3年になります。この間に3回、全国大会と関西支部の第1回大会を含め4回の大会が開かれました。毎回、環境教育の展望とか今日的課題といったテーマでシンポジウムがもたれ、環境教育の目的や在り方をめぐって熱心な討論が行われてきました。また、学会誌の編集委員会においても、環境教育の論文と報告とはどう違うのか？論文にはそれなりの形式がありそれに何か訴える論旨がなければならないのでは？また、他の学会誌と違ってあまり学術性のみを重要視すべきではないなどの論議がなされております。

人間を主体としている環境教育は人間以外の生物を主体としてその環境との相互作用を研究する生態学に比べ複雑であることは確かです。他の生物は個体でも集団でもそれぞれの立場や人間のような利害関係や経済性の問題にならないので因果関係が解析しやすくなっています。ところが人間の行動は、紙や牛乳パック、食品トレイ、空カンなどいずれのリサイクルをとりあげてもその全体像は把握しにくくなっています。こうした活動をしている人達の中からも、牛乳パックで紙を再生するには大量の水が必要だし、トレイの回収や運搬による排気ガスなど再生のためのエネルギー消費などを考えると本当に今の活動でいいのか？などといった疑問の声もでています。こうしたリサイクルを考える前に、トレイや農薬を多量に使っている果物や野菜、亜硝酸ナトリウムなど発色剤を使っている食肉・魚肉、野菜などは買わないといった生活スタイルを変える必要があるといった声も聞かれます。

環境教育は規則による他律ではなく自律による行動をねらいとしているので小さい時からの多角的な学習と教育が必要だと思います。幼児期のしつけも大切だと思います。この場合、自然の神でもいいので〇〇さんにしかられるからいけないというのではなく、宗教的なしつけも家庭教育では必要だと思います。少年期から青年期にかけては

自然体験とともに理科や社会科など各教科でしっかりと自然認識や社会認識の基礎を学ぶ必要があります。さらに科学は万能ではないので環境科学や生態学のような科学だけでなく倫理や哲学的な学習も大切だと思います。

これからの環境教育は、人間・ライフスタイルを変えることやこのような環境に対する認識を深めるとともに、保護、保全だけでなく日本人に合った日本のアメニティを考えていかななくてはならないと思います。

人間、宗教、哲学、環境科学、自然教育、体験学習など多方面からの視点での環境教育に関する論文や実践報告の投稿を期待しております。

山田卓三

編集委員 委員長

山田 卓三
加藤 憲一
金森 正臣
狩山 廣子
北野日出男
木俣美樹男
鈴木 善次
杉浦 嘉雄
東原 昌郎
米田 健